

・・・・平成20年度後志管内社会教育主事等研修会より・・・・

グループワーク 『家庭が抱える悩みを解決できる方策を考える』

平成20年11月28日（金）余市町水明閣

〔北海道教育庁 後志教育局 社会教育指導班〕
主査 柴田真琴氏

アンケートの集計結果の検証等を踏まえ、同研修会にて家庭教育支援に関わる課題やその解決につながる方策等を、以下の6つにしぼって洗い出し。また、事業内容や地域課題との関わりについて、どのような事業形態・内容が有意義かつ有効なものとなるかを併せて考

1. 昨今、子育てや親子関係、しつけ等で問題と感じていることや疑問に感じること

- ・交通機関のないまちは、親がいつでも送迎しないといけない現状がある。
- ・わがままな子が増えると共に、怒らない親もまた増えている。
- ・身近な配偶者や祖父母に相談する傾向が多いが、共働きや仕事等の関係で帰宅時間が遅くなりがちで、身内も近くにいない。だからこそ、これに変わるつながりが必要である。
- ・親子での参加事業にも関わらず、子どもだけの参加が多く、共に体を動かす親子が減ってきている。始まりと終わりの送迎だけでなく、親子の共有する時間を有効に使えればと思う。
- ・親子関係が友達ようになってきている。
- ・子どもを甘やかす親が多い。
- ・親としての自覚がない。
- ・我慢できない子どもが増えてきている。
- ・勉強を重視しない親が多い。
- ・（命・時間などを含めて）物を大切にしない子どもが多い。
- ・親や子のモラルの低下
- ・母親が一人で問題を抱えてしまう傾向
- ・親・子どもが地域との関わりを持たない。（まちの事業に参加しない→人がわからない）
- ・親の「子への無関心」
- ・親子のコミュニケーション不足
- ・挨拶ができない
- ・社会全体に「子育ては大変」という意識が蔓延している。
- ・自分の子ども以外の子どもに、無関心な親が多い。
- ・学校卒業後、子どもから離れていく親
- ・他人の子をしかるといったことが少なくなっている。
- ・家庭教育の定義が明確になっていないように、家庭の意義・定義があいまいになってきている。
- ・家庭は社会の最小単位であり、地域社会、集団生活で生きるための基礎を養う場になっていない

2. 1の原因（あるいは背景）として考えられること

- ・行政のやりすぎや親の甘え→まち全体として甘い風潮
- ・親の育ってきた環境
- ・社会？不況？少子化？共働き？
- ・親だけの時間をつくろうとしたり、他人への押しつけがあるのではないだろうか？
- ・少子化
- ・一人っ子
- ・核家族化
- ・物がありすぎ
- ・商業主義
- ・甘やかせすぎ（子ども中心）
- ・地域との結びつきが薄いため

- ・親が原因（親が積極的でないので、地域の事業等に子どもが参加しない）
- ・親、祖父母
- ・日頃の習慣
- ・地域との関係が希薄
- ・物の豊かさを求めてきた社会→経済優先
- ・社会が変化しているのに、子育ては変化していない
- ・今の時代にあった子育て観がない
- ・地域が無関心
- ・社会環境の急速な変化が大きい。情報化・ポータレス化、物質的な豊かさの平準化等の中で、家庭だけが成長できずに置き去りにになっている。

3. 「家庭教育支援事業」を実施する上で問題となっていること

- ・（積極的に事業展開する）攻めOR（かけこみ寺的な）守り・・・よりどころ？ どこまで行政でやっていくのか？
- ・親をターゲットにすると集客できない。（親は）子どものためになるであろうと期待し参加しようとする。
- ・親子事業を提供しているが、友人の親に預けたり、母親のみの参加で父親の姿が見られない。
- ・講師不足＝予算不足
- ・参加者の固定化
- ・人を集められない。
- ・学習という名の付くものに、なかなか参加してもらえない。
- ・本当に悩みを抱えている人が参加しない。
- ・内容などのプログラムづくり。
- ・事業数が足りない。
- ・事業を実施する上での横の連携がとれていない。
- ・効果的な事業のあり方（ニーズが把握できていない）
- ・閉じこもっている人や子どもを野放しにしている親など、本当に来てもらいたい人が参加してくれない。
- ・自分の子育てが終わるとやめてしまう。次世代への応援、継続がない。
- ・家庭教育という言葉だけが先行し、日常生活に密着した事柄なのに非日常的な事象として捉えられている。
- ・個人主義的な社会環境
- ・実際に子育てしている親の関心を引きつけられるかが問題。

4. 家庭教育支援事業で、工夫している点（あるいは配慮等している点等）

- ・かたくるしくない雰囲気づくり
- ・参加しやすい時間帯（午前中） ※親と子どもはセットで行動するので
- ・カブラなど、父親と共に創作できるプログラムなど
- ・ご褒美をつける
- ・小さな子ども連れでも参加できるように、おもちゃを置いて遊びながら講演をきくことができるようにする
- ・子どもと親が別々に研修できる事業運営
- ・できるだけ多くの親が集まる機会を活用（就学時健診等）
- ・横の連携（学校教育・関係機関等）
- ・予算0ベースでの実施
- ・参加してもらうために、ちょっとした声かけを心掛ける
- ・一人では家庭でない。夫婦や親子と一緒に体感して考えていくことが大切。
- ・父親もしくは親子で参加できる土曜日を中心に事業を行っている。

5. 家庭教育支援事業の中で、どのような点が参加者に喜ばれるか。（自画自賛OK）

- ・同じような年代の子を持つ親と知り合いになれること
- ・同世代（同じ境遇）のつながりができた。
- ・参加者のやりたいことを実施する。
- ・親子で楽しく活動できるもの（そば打ち、農作業体験等）
- ・個別で相談できる体制～みんなの前では聞けないことも、1対1では聞ける！
- ・知り合いができること
- ・日頃、あまり真剣に考えたり、夫婦や親子で話題にならないことを改めて考えたりする機会の提供は喜ばれる。
- ・食品に関するデータを示しながら食育の学習をすること

6. よりよい事業を提供するために、近い将来、どのような家庭教育の支援があればよいか？

- ・本当にきてほしい人を支援するためのピンポイントの家庭教育支援（出張講座など）
- ・友達づくり（親も子も）につながるもの
- ・楽しさの中にも学びのエッセンス
- ・家庭訪問（出前事業）
- ・本来対象としている親子ではなく、地域や一般向け（の中で）事業で行う
- ・女性が居る（保健）部署等との連携
- ・広域で家庭教育支援を行う（他の市町村へ行っても受け入れ体制や交流会などがあれば・・・）
- ・他の部署と連携した事業
- ・親になる前の講座（心構え等）
- ・日常生活に密着したもの（食育・生活習慣）
- ・子育て中の世代を教育・支援するよりも、それを取り巻く世代（上の世代や若者）を支援する仕組み
- ・親子のコミュニケーションが上手くできない家庭が多いので、その具体的な例を示すこと（親子レクなど）